佐賀方言戯作の終助詞バイとバン

江口泰生

佐賀の方言戯作の中でも注目されるのが、蒲原大蔵（一編舎十九　一七八三～一八五七）の諸作品である。『佐賀県近世資料』第九編第一巻（佐賀県立図書館二〇〇四）で網羅され、田中道雄等による翻刻・解説・注釈が行われて利用しやすくなった。ここでは、そこにみられる終助詞バイとバンの用法差について述べてみたい。

蒲原大蔵の方言戯作については、吉町義雄一九七六『九州のコトバ』（双文社）や篠崎久弼一九九七『長崎方言の歴史的研究』（長崎文献社）の研究がある。

終助詞バイとバンの違いとしては次のような指摘がある。小野志真男一九六九「親愛の語調」（『九州方言の基礎的研究』風間書房）、同「待遇関係で目下へ」（『九州地方の方言』国書刊行会）という待遇差、小野志真男一九五四「佐賀県方言区画概観」（『佐賀大学教育学部研究論文集』4）、江口一九八九「九州方言研究史　佐賀県」（『九州方言の史的研究』桜楓社）で『滑稽洒落　一寸見た夢物語』で地域差を指摘した。中村萬里編二〇〇五『即訳ーふくおか方言集』（西日本新聞社）でも地域差が指摘されている。坂口至（熊本大学）直談では、「長崎市内ではバイ専用（相手がいようがいまいが使える）、周辺ではバナ（必ず相手に投げかける）」という。以上は現代方言からバイとバンをminimal pair（最小対）と位置づけての記述であるが、歴史的な観点を導入してみたらどうなるのか、というのが本論の目的である。

蒲原大蔵戯作中のバイとバンの用例数は左表のとおり。

作品名	成立	バイ	バン
『伊勢道中不案内記』初編	天保年間か（一八三〇～一八四四）	5	5
『伊勢道中不案内記』二編	同右	11	5
『伊勢道中不案内記』後編	嘉永七年以降（一八五四～）	9	0
『古今風俗太平記』	天保一五年（一八四四）	2	0
『田舎狂言幕内外』	弘化四年（一八四七）	5	0

『町々謗評番』は前編（若者）と後編（民衆）で登場人物に差があるので分けて示す。「行かねば→行かんバン」のような接続助詞バ出自の例はなかった。なおバナの例が一例あるが（『七福神評定録』の例）、長崎の人の言葉として書かれているので省く（浮船「モシナあんまりほたへなはんな。ほこりが立バナ」７８４）。また以下、伊勢、風俗、狂言、評番、双紙、盛衰記と略称し、所在は佐賀県立図書館本の頁数で示す。表記を改めたところがある。

そこでまずバイの用例を検討してみる。全例を検討してみて、（ア）なにを証拠にバイを使用しているか、具体的には視覚か聴覚か。（イ）他の形式が接続しているかどうか。（ウ）証拠→結論のどちらにバイが接続するか、という観点から分類するのが良さそうである。

バイには大きくいうと、現場で見て気づいた内容を述べる用法（視覚用法）と、相手の言葉で気づいた内容を述べる用法（聴覚用法）がある。視覚用法には大きく、現場で見たままを述べる用法と、見た事から何らかの推論を述べる用法がある。

（1）現場で見て気づいた内容をそのまま述べる用法は、見て気づくので、呼び掛け語や現場指示詞を伴う場合が多い。

（文吉が来たので）文さん、よか所へ来て呉れたバイのふ。（伊勢６２１）

（2）現場で見た内容そのものではなく、見た内容から推論して気づいた内容を述べる用法がある。

銀さん・久米さんぢやァなつかァ……まづ〳〵何事もなかつたバイのふ（伊勢６５２）

（3）これから転じて、過去の出来事が擬似的な現場で見たことと似ていると気づく用法がある。

今思へは夢見たごたるばひ（双紙９４１）

聴覚用法にも、聴いたことをそのまま述べる引用的な用法（4～6）と、聴いたことから推論する用法（7～9）がある。

（4）まず相手の言葉で気づいた内容をそのまま述べる用法がある。相手の言葉をそのまま述べるため、必ずトイウが付き、複合用法といえる。

（洲物の名前「もり口ておます」に応えて）大根の事ァ京都ではもり口ちうバイ（伊勢６５５）

（5）相手の言葉で気づき、言葉の一部を引用して述べる用法。

（4）の変種といえる。

『町々餝評番』前編	嘉永二年（一八四九）	0	1
『町々餝評番』後編	同右	3	4
『おさらば双紙』	嘉永五年（一八五二）	1	27
『町方盛衰記』	嘉永末年以降（一八五四～）	2	4

『町々餝評番』は前編（若者）と後編（民衆）で登場人物に差があるので分けて示す。「行かねば→行かんバン」のような接続助詞バ出自の例はなかった。なおバナの例が一例あるが（『七福神評定録』の例）、長崎の人の言葉として書かれているので省く（浮船「モシナあんまりほたへなはんな。ほこりが立バナ」78 4）。また以下、伊勢、風俗、狂言、評番、双紙、盛衰記と略称し所在は佐賀県立図書館本の頁数で示す。表記を改めたところがある。

そこでまずバイの用例を検討してみる。全例を検討してみて（ア）なにを証拠にバイを使用しているか、具体的には視覚か聴覚か。（イ）他の形式が接続しているかどうか。（ウ）証拠→結論のどちらにバイが接続するか、という観点から分類するのが良さそうである。

バイには大きくいうと、現場で見て気づいた内容を述べる用法（視覚用法）と、相手の言葉で気づいた内容を述べる用法（聴覚用法）がある。視覚用法には大きく、現場で見たままを述べる用法と、見た事から何らかの推論を述べる用法がある。

（1）現場で見て気づいた内容をそのまま述べる用法は、見て気づくので、呼び掛け語や現場指示詞を伴う場合が多い。

（文吉が来たので）文さん、よか所へ来て呉れたバイのふ。（伊勢621）

（2）現場で見た内容そのものではなく、見た内容から推論して気づいた内容を述べる用法がある。

銀さん・久米さんぢやァなつかァ……まづ〳〵何事もなかつたバイのふ（伊勢652）

（3）これから転じて、過去の出来事が擬似的な現場で見たことと似ていると気づく用法がある。

今思へは夢見たごたるばひ（双紙941）

聴覚用法にも、聴いたことをそのまま述べる引用的な用法（4～6）と、聴いたことから推論する用法（7～9）がある。

（4）まず相手の言葉で気づいた内容をそのまま述べる用法がある。相手の言葉をそのまま述べるため、必ずトイウが付き、複合用法といえる。

（濱物の名前「もり口ておます」に応えて）大根の事ァ京都ではもり口ちうバイ（伊勢655）

（5）相手の言葉で気づき、言葉の一部を引用して述べる用法。

（4）の変種といえる。

（「虎と竜の細工」という言葉を受けて）虎バイのふ（評番882）

（6）事態が諺・一般論と同じであると気づき、諺・一般論をそのまま引用する用法。

旅ではめつたにものいふ事はならぬバイ。（伊勢708）

（7）相手の言葉を元に、そこから推論して気づいた内容にバイが接続する用法。

（「高麗からす」という言葉を受けて）ゑすか（＝恐ろしい）横道な鳥バイのふ（評番882）

（8）相手の言葉から相手の評価に気づく。推論が働いているので、（7）の変種か。

利口な事を言ふバイなひ（盛衰991）

（9）相手の言葉が理解できないと気づき、事態をあきらめたり、相手の言葉を全否定する用法。相手の言葉への評価。

（方言が通じず）いつちよふでも（＝少しも）分らぬバイ（伊勢711）

次にバイの上接部分を検討してみると、多くが無意図的、状態を表す文になっている。

【名詞】（そこは銭を）欲しがる所　袖がないもの　ホンマ物【状態】来てくれた　もてる　縫い付けてある　夢みたごたる　何事もなかった　見事にたばかった　（お前は偽物を）つかませた　（お前は）無理なことをする　（野狐に）化かされた　雛鳥がおったところじゃろう　盲じゃろう　難儀と見える　もり口（帰帆・赤犬）という　（彼が）座する　いくら言っても閉かん

こうした偏りがあるのは、バイは現場（ないし仮想現場）において視覚情報や相手の言葉（ないしは世間一般に言われている言葉）で気づいたこと、推論したことを述べる場合に用いられるためと思われる。

以上を纏めると、見た事を述べる、見た事を証拠として結論する、聞いた事を述べる、聞いた事を証拠として結論するなど、全体としては見たり聞いたりして気づいたことがバイの主たる用法になっていると思われる。

- 視覚用法
  - 現場用法……現場で見て気づいた内容をそのまま述べる用法（1）
  - 推論用法……見た内容から推論して気づいた内容を述べる用法（2）
    - 出来事が擬似的な現場で見て気づいたことと気づく用法（3）
- 聴覚用法
  - 引用用法
    - 外部情報……相手の言葉で気づいた内容をそのまま述べる用法（4）
    - 知識……相手の言葉で気づき、その言葉の一部を述べる用法（5）
    - 推論可……相手の言葉から推論し気づいた内容を述べる用法（6）
  - 推論用法
    - 推論不可（9）
    - 相手の言葉から相手の評価に気づく用法（8）

これはバイが元々ワイを語源としていると思われることの証拠ともなる。たとえば本居宣長『古今集遠鏡』俗語訳が気づきのケリをワイで訳していることとも合致するのではなかろうか。

次にバンの用例を検討する。事態の局面に注目し、人称別に分類してみる。

(1) 自身の今後の行動（意志動詞ル形）
よさりァ（＝夜に）来るバン（伊勢562）

(2) 自身の今後の状態
おども（＝お前も）俺もま一足で袋（＝袋一つの夜逃げ）バンのふ（双紙941）

(3) 自身の現状（オル・トル形）
わたしどんも、みんな銭たァとりまつするバン（伊勢648）

(4) 自身の行動意志の否定（意志動詞＋マッセン・ン形）
わたし共は皆々ちと腹が悪かによって、濟物は食まつせんバン（伊勢607）

(5) 自分の言葉への補足
（今述べたこと）こりやふ五拾年後の事バン（双紙943）

(6) 聞き手の現在の状態（二人称　状態述語）
このひつさんの俺ふまて物も言ふてちや無かバン（＝言葉もかけてくれないよ）（双紙943）

(7) 聞き手の今後の行動の禁止（禁止表現ナラン形）
川どもに入る事はならんバン（伊勢564）

(8) 聞き手の今後の状態（状態動詞　ニナル形）
（田を見たらお前は）腹一杯になるバン（双紙940）

(9) 第三者が日ごろ良くする行動（意志動詞ル・オル形）
（彼は）いつでも、良か付け合せばかり持て行くバン（伊勢650）

(10) 第三者の同定（〜ハ〜ザル＝デアル形）
（背中に）かたげておるは金ざんバンのふ（盛衰994）

(11) 一般世界に関する話し手の考え（総称　ル形）
交易は相互ひ、そふすれは商人も飯に有り付くバン（双紙948）

(12) 現在進行中の事態の描写
時にもふ廻庵さん、日の暮れまつするバン（評番883）

(13) 物事の同定（〜ハ〜トヨム・カク）
（申芸は）さるの芸と背くバン（伊勢563）

決定的に異なるのはバンがル形・進行形のみを接続することである。バンは自身の現状・意志・推量・断定、聞き手への命令・禁止、第三者や一般世界に関する話し手の観察・考え・同定・描写などを、話し手が相手に一方的に意見や意志や状態を表明する用法だといえる。先行研究において、バンが目下にしか使用できない（親愛の意がある）とされるのは、こうした一方的な言い方が目下にしか通用しないからであろう。またバイと違って意志的表現にも接続する。

『筑紫方言』（江戸末期『国語学大系』第二〇巻）には「さうであらう　さうばな／こうであらう　こうばな／もうよいはな　な

ど云ことをも　もうよいばなと云」のように、バナは自身の意志・推量などを相手に一方的に表明するものとして用いられている。バンはこのバナを語源とするものと思われる。

以上のように検討してみると、親愛性や待遇差、バナとバンの方言分布の相補性、バイとバンの時間性の差などがある程度、説明できるように思われる。また歴史的には元々は別語だったものが形態的な類似からminimal pairを形成し、意味的に対をなしていくといった過程も浮かび上がるのではなかろうか。

・本稿は二〇〇六年三月筑紫談話会熊本大会や二〇〇六年六月四日の九州大学国語国文学会で「佐賀方言戯作の文末表現」として口頭発表したものである。発表の際、多くの方にご意見をいただいた。感謝申し上げる。また文献調査や口頭発表においては、平成十八年度文部科学省科学研究費補助金、基盤研究（C）「古辞書・ロシア資料による日本語形態音韻の研究」（課題番号　17520300）の支援を受けた。

（えぐち　やすお　岡山大学大学院社会文化科学研究科教授）

研究室受贈図書雑誌目録V

国語の研究（大分大学国語国文学会）三四

国際交流基金　日本語教育紀要（国際交流基金）五

国際日本文学研究集会会議録（国文学研究資料館）三二

國文（お茶の水女子大学国語国文学会）一一一

國文學攷（広島大学国語国文学会）二〇〇、二〇一、二〇二、二〇三

国文学研究（早稲田大学国文学会）一五七、一五八、一五九

国文学研究資料館紀要　文学研究篇（国文学研究資料館）三四、三五

国文学研究資料館年報（国文学研究資料館）平成十九年度

国文学研究ノート（神戸大学「研究ノート」の会）四四、四五

国文学論考（都留文科大学国語国文学会）四五

國文學論叢（龍谷大學國文學會）五四

国文白百合（白百合女子大学国語国文学会）四十

國文目白（日本女子大学国語国文学会編）四八

国文論藻（京都女子大学大学院文学研究科研究紀要）八

国文論叢（神戸大学文学部国語国文学会）四一

古代研究（早稲田古代研究会）四二

古代文学研究　第二次（古代文学研究会）一八

語文（日本大学国文学会）一三二、一三三、一三四、一三五

語文研究（九州大学国語国文学会）一〇六、一〇七

駒澤國文（駒澤大学文学部国文学研究室）四六

堺・南大阪地域学研究論集（大阪府立大学）二

相模国文（相模女子大学国文研究会）三六

滋賀大國文（滋賀大学教育学部国語研究室）四七